



気づく感覚を取り戻す

1年前の「Sense of Mission 6月号」で「小さな行動」という話をしました。それは、みなさんのキャリア形成においての2つのキーワードである「情報」と「行動」の話でした。「情報」は、今の情報化社会において差がないと言っていると思います。つまり差が出るのは「行動」の方です。「行動」でも特に、「小さな行動」をすることで得られる**“自分だけの情報”**で差が出るという話です。

この「行動」についてですが、みなさんが「小さな行動」をする際も、特別なことをしている気負い感があるように思うときがあります。「小さな行動」とは、分からなかったら人に聞くとか、自分の考えを話してみることです。どんな場面でもできるのですが、正解や他者との比較にとらわれているような気がします。

最近、あるワークショップの実践を読みました。タイトルは「いつもの学校で感性の扉は開く」というものでした。

このワークショップは、まずは、校舎の周りをふらふら歩き、なんとなく気になるものを写真に撮ります。「映える」は禁止で、自分の感度に素直になることが条件です。でも、生徒は気になるものがわからず戸惑います。そんな中、次第にとりあえず写真を撮り始めます。ファシリテーターの先生が『歩くという字は「少」し「止」まると書く。何かに気づいたらとりあえず写真を撮ろう。映えない写真でOK!』と声をかけます。

次に、撮った写真の中から1枚選んで、見たままスケッチします。生徒は自分で感じたまま、細部にこだわって何かを表現しようとしています。

最後に、何を描いたのか、どこが気になったのか発表します。発表をするときに、素直に何かを見つける気づきや、何かにつながっていく気づきを感じ得ます。

この実践を読んで、私は、構えずに気になるものを見つける、誰もが持っている好奇心を呼び起こすことは大切なことだと思いました。そのことで、**気づく感覚を取り戻したり、気づく力を鍛えたりできる**と思いました。このことは人に対する気持ちの部分にも関係すると思いました。

人の発達段階において、人にはそもそも誰にでも好奇心があるとされています。幼児期前期（2～4歳）は拡散的好奇心と言われ、赤ちゃんが何でも口に入れたり、触ったりするようなことを言います。その時、親は、当然安全確保が大切な支援になります。幼児期後期（4～6歳）になると特殊的好奇心と言われ、例えば、昆虫に興味をもつとかボール遊びに興味をもつようなことを言います。その時、親は、昆虫図鑑を与えたり、野球を教えたりして刺激し、共感する支援になります。この幼児期の「好奇心」を充足させることは、中高生年代での自ら学ぶ意欲の中核の形成にも影響すると言われています。

このことから、このワークショップは、好奇心を呼び覚まし、**気づく感覚を取り戻す方法の一つ**になると思いました。

このワークショップにおいて『「問い」や「違和感のあるもの」を発見して』などと言うと変なスイッチが入って、型にはまりたがったり、何かの答えに寄せたがったりします。そこで「なんとなく、とりあえず、あてもなく」の3つの声かけが、生徒の心をオープンにして**気づく感覚を取り戻す**ことになると思います。

これからは「情報」で得られる知識よりも、「行動」で得られる経験資産が求められる時代です。「小さな行動」をすることで得られる自ら気づいた経験が大切になります。客観的に観察する力と自分で感じたことをつなげながら**気づく力を鍛えていく**のです。この力が、みなさんがこれから何かをするときの基礎力になるのです。